

## 【一般演題4】 第16席

## 『診病奇恠』の検討報告

京都 宿野 孝

日本において独特な発展を遂げた診断法である腹診は、大塚敬節氏の分類によると“『難経』系腹診”と“『傷寒論』系腹診”、またこの2者を融合させる目的で著された“折衷系腹診”の3つに分けられる。この分類は時代的な腹診運用の目的意識ともほぼ合致し、腹診あるいは腹診書の大まかな特徴を認識する上で、現在まで、さらに今後に至っても標準となりつづけるだろう。

本学会の第2回大会で、『難経』系腹診書のひとつである意斎流に注目し、検討を行ったが、その結果、単に腎間の動気を重視し、腹部に臓腑を配当して診断を行うという『難経』系腹診の一般的なイメージのみではとらえきれない幾つの特徴を示していることが確認された。この傾向は、意斎流という一流派に限らず、そのほか多くの腹診書にも見られると推測される。したがって、腹診書に関して個々のより具体的な検討が必要であることが示唆される。

腹診・腹診書の検討において、ある一定段階までの詳細さが要求されるということは間違いなからう。では、一流派なり一書目の腹診書を追求することで事足りるのかということ、これまた時代錯誤的な古典認識というよりほかない。文献の絶対量が少ない時代ならいざ知らず、多くの文献に恵まれる現在では、少ない資料で全般的な認識をもつというのは、説得力にかける。

したがって、今後の腹診（腹診に限らないが）の研究は、時代の要求からみても、全体的かつ詳細（具体的）な検討とそれによる把握へと移行していくことが考えられる。そして、臨床への応用に関しても、古典文献のより全体的な把握の基盤に立つことが要求され、かつ前提となってくるであろう。

今回の検討の対象は『診病奇恠』である。『診病奇恠』は、『難経』系腹診の集大成として、諸説を引用集録した形式になっている。これを検討することで、より幅の広い範囲の腹診書を検討することができるだろう。